

# 『太平記』の西施説話考

——比較文学の視点から——

徐 萍

## 一、はじめに

『太平記』巻四では中国由来の呉越説話が詳細に語られる。その内容は越王勾踐の立場から、越が呉と夫椒で合戦して敗れ、会稽山で屈辱な講和を結ぶまでの「会稽の戦」、勾踐が囚人として呉に仕えて、三年後漸く越に帰国するまでの「囚人勾踐」、越に戻ってから臥薪嘗胆して遂に呉を滅亡するまでの「復讐物語」に分けられる。西施説話は「復讐物語」に見られる。

『太平記』の西施説話について、川口久雄氏は「唱導文学独特のものあわれの日本的な哀調と、四六の流れをうけた華麗な美文調」で語られたことを指摘し、増田欣氏はその源泉に注目し、『太平記』の西施説話は『呉越春秋』に

よらず、傾国の美女としての伝承と『史記』「妻ハ妾ト為ラン」の語を結びつけて創作したものだと述べる。<sup>(2)</sup>しかし、増田氏の挙げた西施伝承のほか、『和漢朗詠集』古注釈などの「中世史記」の世界をも視野に入れるべきであろう。また、本論は先行研究<sup>(3)</sup>に指摘されていない、西施説話に見られる矛盾に注目し、西施説話に影を落としているであろう話型を分析したうえで、新たな読みの可能性を提示してみたい。

## 二、西施伝承の源泉

『史記』には「西施」という固有名詞は記されていない。『呉越春秋』<sup>(1)</sup>巻九「勾踐陰謀外伝」では、

(勾踐)十二年、①越王謂「大夫種」曰、「孤聞<sup>2</sup>呉王淫而

好色、惑乱沈湎、不<sub>レ</sub>領<sub>二</sub>政事<sub>一</sub>。因<sub>レ</sub>此而謀、可乎。」種曰、「可<sub>レ</sub>破。夫吳王淫而好色、宰嚭佞以曳<sub>レ</sub>心、往<sub>二</sub>獻<sub>二</sub>美女<sub>一</sub>、其必受<sub>レ</sub>之。惟王選<sub>二</sub>扱<sub>二</sub>美女二人<sub>一</sub>而進<sub>レ</sub>之。」越王曰、「善。」②乃使<sub>二</sub>相者國中<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>苧蘿山鬻<sub>レ</sub>薪之女<sub>一</sub>、曰<sub>二</sub>西施、鄭旦<sub>一</sub>。飾<sub>二</sub>以<sub>二</sub>羅縠<sub>一</sub>、教<sub>二</sub>以<sub>二</sub>容步<sub>一</sub>、習<sub>二</sub>於土城<sub>一</sub>、臨<sub>二</sub>以都巷<sub>一</sub>、三年學服而獻<sub>二</sub>於吳<sub>一</sub>。

と記される。ここで、一点ほど注意しておきたい。まず、西施たちを選ぶ動機は淫乱な呉王の更なる失政を促すためとされていることである(傍線部①)。つまり、西施の登場は最初から政治的な色合いが濃く、西施は呉を滅ぼす役目を担う道具という一面をもつ。もう一点は西施の出身が越の苧蘿山(現在の浙江省諸暨市)であり、薪売りの娘ということである。しかも、呉王を沈溺させるために礼儀などを三年間習った(傍線部②)。換言すれば、スパイの特訓を受けたのである。『越絶書』も上述した二点において『呉越春秋』とおおむね一致している。

時代がやや降って、晋の王嘉も『拾遺記』で次のように書き記した。

越謀<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>呉、蓄<sub>二</sub>天下奇宝美人異味<sub>一</sub>進<sub>二</sub>於<sub>二</sub>吳<sub>一</sub>、殺<sub>二</sub>三牲<sub>一</sub>以<sub>二</sub>祈<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>、殺<sub>二</sub>龍蛇<sub>一</sub>以<sub>二</sub>祠<sub>二</sub>川岳<sub>一</sub>。嬌<sub>二</sub>以<sub>二</sub>江南億萬戶民<sub>一</sub>、輸<sub>レ</sub>呉為<sub>二</sub>傭保<sub>一</sub>、越又有<sub>二</sub>美女二人<sub>一</sub>、一

名<sub>二</sub>夷光<sub>一</sub>、二名<sub>二</sub>修明<sub>一</sub>、即西施鄭旦之別名、以<sub>二</sub>貢<sub>二</sub>於<sub>二</sub>吳<sub>一</sub>。(以下略)

越が呉を滅ぼすのに宝物、美人、珍味などを用いたとある。その美人とはつまり西施(別名夷光)と鄭旦(別名修明)である。

散逸した『拾遺記』の文を編纂する際、梁の蕭綺が各条に自己の論を録の名義で付した。右の条に関して、蕭綺はこう論じた。

録曰(中略)夫興亡之道、匪<sub>レ</sub>推<sub>二</sub>之<sub>一</sub>曆数<sub>一</sub>、亦由<sub>二</sub>才力<sub>一</sub>而致也。觀<sub>二</sub>越之滅<sub>レ</sub>呉、屈柔之礼尽焉。薦<sub>二</sub>非世之絶<sub>レ</sub>姫<sub>一</sub>、収<sub>二</sub>歷代之神宝<sub>一</sub>、斯皆跡殊而事同矣。博識君子驗<sub>二</sub>斯言<sub>一</sub>焉。

興亡の道は天道(曆数)によって決められるのはいうまでもないが、その一方で知力にもよる。越が呉を滅したのは、屈從して柔順な礼を尽くしたからである。絶世の美女を薦め、世に珍しい神宝を集めて献上したことは、呉を滅ぼす手段という点では同じであると論じる(傍線部)。献上された神宝と同格に位置づけられていることから、西施がただ政略的な道具に過ぎないと捉えられていたことを裏付けている。

### 三、西施伝承の共通認識

古来、美人西施を記録する文献は多い。詳細は前掲した増田氏の論文と『葦蘿西施志』<sup>(7)</sup>を参照されたい。ここでは、広く日本に普及した徐註本『蒙求』「西施捧心」の後半を挙げたい。

西施越女、所謂西子也。有<sub>二</sub>絶世之美<sub>一</sub>、越王勾踐献<sub>二</sub>之呉王夫差<sub>一</sub>。夫差嬖<sub>レ</sub>之、卒至<sub>レ</sub>傾<sub>レ</sub>国。

西施は絶世の美女で、呉王夫差に献じられた。夫差は西施を愛したために、国を傾けるに至ったという。

ところで、『管子』小称編では「毛嬙西施、天下之美人也。」とある。『粧楼記』(唐・張泌撰)では、「西施毛嬙皆越女」の項目に、「西施、夏姬也。勾踐献<sub>レ</sub>呉。又毛嬙、司馬云、古美人。」と毛嬙と一対にして記し、さらに、西施・毛嬙が一対になるのは、同じ越の国の出身だからだとする。その根拠は不明であるが、当時において、西施と毛嬙を併称するのが一般的であったことを裏付けていよう。また、『文選』に収録された宋玉の「神女賦」でも、「毛嬙鄠<sub>レ</sub>袂、不足<sub>二</sub>程式<sub>一</sub>、西施掩<sub>レ</sub>面、比<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>色。」と、「毛嬙、西施」を以て神女の美貌を表現する。そのように、毛嬙と西施を併称して美人を表す意識は『太平記』巻一にも見られる。「毛

嬙・西施モ面ヲ恥ヂ」と中宮の美しい姿を表現している。日本に見られる「毛嬙・西施」の併称は広く流布した『文選』及びその注が大きな役割を果たしたことが考えられる。また、『文選』の注釈を用いて、「西施」という固有名詞を説明する文献は、例えば『和漢朗詠集』の古注釈にも多い。『和漢朗詠集私注』では「夜雨偷湿、曾波之眼新嬌。曉風緩吹、不言之唇先咲。」(上巻・桃)の一文について、以下のように注釈を施している。

文選曰、南国有<sub>二</sub>佳人<sub>一</sub>、容貌如<sub>二</sub>桃李<sub>一</sub>。注曰、越曰<sub>二</sub>南国<sub>一</sub>也。西施本越女。後為<sub>二</sub>呉王后<sub>一</sub>。(『和漢朗詠註抄』、『和漢朗詠集和談鈔』(以下『和談鈔注』と称す)、『和漢朗詠集永濟注』(以下『永濟注』と称す)の同項目でもほぼ同様な注釈が見られる)。

また、『書陵部本朗詠抄』(以下『書陵部本注』と称す)では、「西施顔色今何在、応<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>春風百草頭<sub>一</sub>」(下巻・草)をこゝに注釈している。

文選ニ云、南国有佳人、容貌如<sub>二</sub>桃李<sub>一</sub>。<sup>(8)</sup>註云、南国トハ、越国ヲ云。佳人トハ西施也。紅顔、美ナルコトハ、桃李花ニ似タリ。

右に示したとおり、諸注は文選注からほぼ同文を引いて「西施」の美を説明している。

ところが、西施の美貌に関するエピソードはほかにもいくつかある。『蒙求』「西施捧心」の前半では、醜女との対比で西施の美を語る。

莊子曰、西施病<sup>レ</sup>心而顰<sup>二</sup>其里<sup>一</sup>。其里之醜人、見而美<sup>レ</sup>之、婦亦捧<sup>レ</sup>心而顰<sup>二</sup>其里<sup>一</sup>、彼知<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>顰而不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>顰<sup>レ</sup>之所<sup>二</sup>以美<sup>一</sup>。

西施がまだ里にいたとき、心配事があるとよく顔をしかめていた。その里にいる醜女はその姿を美しいと思ひ、家に帰って心配事がありそうに胸を抱いて顔をしかめるまねをしていた。その醜女はしかめ面の美しさは感じ取れるのだが、なぜそれが美しいのかはわからなかったのだ、という説明になっている。ここは『莊子』を出典とはしているけれども、『莊子』では、西施のまねをした醜女を見て、金持ちは門を閉じて出かけなくなり、貧乏人は家族を連れて走り去るなどと里人の反応も書かれている。

対比のみならず、西施の美を誇張するような逸話も広まっていたようである。例えば『尚史』<sup>(10)</sup>には、

西施越之美女、以献<sup>二</sup>于呉<sup>一</sup>。呉王幸<sup>レ</sup>之。每<sup>レ</sup>入市、人願<sup>レ</sup>見者、先輸<sup>二</sup>金錢一文<sup>一</sup>。

とある。類似した伝承はまた『和談鈔注』「西施顔色今何在、応<sup>レ</sup>在<sup>二</sup>春風百草頭<sup>一</sup>」の注釈にも現れる。

西施者、越女也。絶<sup>レ</sup>代容貌。後、呉王成<sup>レ</sup>后。每<sup>二</sup>入市<sup>一</sup>遊<sup>二</sup>、願<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>人々、必<sup>ス</sup>金錢<sup>ヲ</sup>出<sup>シテ</sup>見<sup>ケル</sup>也。

西施は、呉王夫差を誘惑する使命を与えられ、夫差に献じられて后となった。市場に入って遊ぶ度に、庶民の人々はその美貌を一見せんと願ひ、銭を出したという。『和談鈔注』の文脈からすれば、西施が后になった後も市場に出入りしたと読み取れるが、現実にはそれはありえないだろう。しかし、いずれにせよ、金錢を投じてまでもその美しさを目にしたという人々の切実な願ひの描写を通じて、絶世の美人である「西施」像が一層強調されたことに違いない。正史にはあまり多く語られない美女「西施」は、このように詩文や注釈などによつて、日中ともに流布したのである。

#### 四、『太平記』の「西施説話」——恩愛物語

『太平記』の西施説話は、勾踐物語で言えば「復讐物語」の部分に現れる。そもそも「復讐物語」とは、帰国することが許された勾踐が、臥薪嘗胆して呉を討ち滅ぼす過程を描くものである。しかし『太平記』では、勾踐は、自身の愛妃である西施を、呉王夫差が横恋慕して奪おうとするのを聞き、強く断ろうとした。

我呉王夫差ガ陣ニ降テ、恥ヲ忘レ石淋ヲ嘗テ命ヲ助カ

リシ事、全ク国ヲ保チ身ヲ榮サンニハ非ズ、只西施ニ  
偕老ノ契ヲ結バン為ナリキ。生前ニ一度別テ死シテ後  
ニ再会ヲ期セバ、万乗ノ国ヲ保テモ何ガ為。サレバ、  
「縦」呉越ノ会盟破テ二度我レ呉ノ為ニ擒ト成トモ、西  
施ヲ他国工送シ事ハ不可レ有トゾ宣給ケル。

呉以降參して恥辱を受けてまで生き長らえたのは、決して  
国家や自分のためではなく、西施と偕老同穴の契りを結ぶ  
ためだという（傍線部）。したがって、たとえ呉越の同盟関  
係が破れて、自身が再び囚人になろうとも、西施を夫差に  
献ずるつもりはないと断言するのである。

しかし、それは会稽山で屈辱的な講和を結んだ際の初心  
とは異なる。そもそも、西施物語は「復讐物語」に配置さ  
れており、復讐が主軸になるはずである。にもかかわらず、  
尋常ならざる努力によってかろうじて帰国を許されたばかり  
の勾践が、会稽の恥を雪ぐ復讐よりも愛妾との恩愛を優  
先するとの記述は、あまりにも唐突に現れる。物語の本筋  
からずれてしまっているといわざるをえない。そのような  
記述を生じさせた理由は何であろうか。

その疑問を解くために、まず『太平記』における西施の  
描写を確認しておきたい。西施が物語に登場するのは、勾  
践の帰国した直後である。

又、越王ノ妃ニ西施ト云フ美人御座ケリ。容色世ニ勝  
レ、嬋娟比<sup>タケヒ</sup>無リシカバ、越王殊ニ寵愛シテ且クモ側  
ヲ放レ給ハザリキ。(中略)イトゞワリナク藕<sup>コウケ</sup>闌テ、  
梨花一枝春雨<sup>①</sup>「二縦<sup>②</sup>」、タトヘン方モ無カリケリ。

傍線を付した一文は、『長恨歌』の「梨花一枝春雨」の  
借用であり、美人を表現する慣例句でもある。また、西施  
の入呉が決まった後も、『太平記』は次のように西施を紹介  
している。

彼西施ト申ハ、天下第一ノ美人ナリ。粧成テ一度笑ハ  
百ノ媚、君ガ眼ヲ迷テ漸ク池上ニ花無カト疑フ。艶閉  
テ纔ニ見レバ、千態人ノ心ヲ蕩シテ忽ニ雲間ニ月ヲ失  
カト怪ル。

傍線部の「粧成テ一度笑ハ百ノ媚」は、楊貴妃の美態を詠  
出する、『長恨歌』の「回眸一笑百媚生、六宮粉黛無顔  
色」を生かした表現である。傍線部の文言は、たとえば『遊  
仙窟』で十娘の美態を現する句「纔舒<sup>③</sup>兩頬<sup>④</sup>、熟疑<sup>⑤</sup>地上  
無<sup>⑥</sup>花、乍出<sup>⑦</sup>双眉<sup>⑧</sup>、漸覺<sup>⑨</sup>天辺失<sup>⑩</sup>月」がある。また片  
仮名本『蒙求和歌』「西施捧心<sup>⑪</sup> 夕顔<sup>⑫</sup>の和歌、「ユフカホ  
ノタソカレトキノソラメニモタクヒニスヘキハナノナキカ  
ナ」も見られる。いずれも美人を表す典型的な表現である。  
換言すれば、西施なりの特質が失われ、類型的な美人像が

形成されている。それは『太平記』に限ることなく、中世日本における西施伝承全般にいえることではある（後述）が、『太平記』の西施説話は特に『長恨歌』の表現を愛用することが目立つ。

それは西施への直接描写にとどまらない。たとえば、西施を呉王に差し出すことを提言する范蠡は、西施を渡さなければ、越は再び滅ぼされ、結局西施も奪われるだろうことを述べたうえで、西施にまで手を伸ばす夫差の好色ぶりを見れば、美人に耽溺して失政するに違いない、そうならば、呉を滅ぼして西施を取り戻すことも遠い先ではないと説く。その際、范蠡は、

国費工民背ン時ニ及テ、兵ヲ起シ呉ヲ責ラレンニ勝事ヲ立<sup>タテトコロ</sup>ニ得ツベシ。是子孫万歳ニ及テ、夫人連理ノ御契久カルベキ道ニテ候。

と言う。傍線を付した「夫人連理ノ御契」は無論「在<sup>レ</sup>天願為<sup>二</sup>比翼鳥、在<sup>レ</sup>地願為<sup>二</sup>連理枝」に基づく表現である。また、西施を呉に送り出した勾踐の悲しみを、「空キ床ニ独リ寝テ、夢ニモ責テ相見バヤト」と表現した。おそらく楊貴妃の死後、夢で会うことを期待しつつも眠れずにいた、『長恨歌』の描く玄宗の姿を重ねているかと思われる。このように『太平記』は、玄宗と楊貴妃の恩愛物語を勾踐と

西施に投影し、西施をスパイのごとき美人から大きく転換しているのである。

なお「連理の枝」の語は、勾踐と西施とが「相思相愛の仲」であるかのような印象を生み出す。『太平記』は西施が呉に赴くときの悲哀を語る際、勾踐と西施をそのように描いていると見受けられる。

西施ハ小鹿ノ角ノ束ノ間モ別テ有ベキ物カヤト思シ中ヲ、却ラレテ未ダ幼キ太子王韜興ヲモ云知不<sup>レ</sup>思置キ、思ハヌ旅ニ出給ヘバ、別レヲ慕フ涙サヘ且ガ程モ留ラデ、袂ノ乾ク間モ無シ。越王ハ又是ヤ限ノ別ナルラント堪ヌ思ニ臥シ沈デ、其方ノ空ヲ遙々ト詠遣給ヘバ、迢々タル暮山ノ雲、イトゞ涙ノ雨ト成リ、空キ床ニ独リ寝テ夢ニモ責テ相見バヤト、枕ヲ臥シ給ヘバ、添カヒモ無キ面影ニ為ン方ナシト歎給フモ、ゲニ理ナリト覺タリ。

不本意にも呉の后になることは、西施もさることながら、勾踐も哀れでならない。「堪ヌ思ニ臥シ沈デ」以下の心情描写の主語は、もちろん「越王」であるが、西施のそれと見紛うばかりである。特に天正本にその傾向は著しい。

されば、晩唐の詩に（詩は略）と。西施が越王の宮を離れて、姑蘇城に赴くその愁ひを、後來の詩人筆端に



賦し尽くしけること、まことに絶章とぞ覺えたる。

と、晩唐の詩歌を引いて、右に引用した内容をすべて西施の哀愁としてまとめたのである。

このように、『太平記』は、西施説話を描く際、復讐の意志を背後に押しやり、ひたすら恩愛物語に耽る傾向が見られる。しかし、そうなれば、復讐を軸とするはずの勾踐物語においては矛盾を生み出さざるを得ない。『太平記』はそれを矛盾のまま残してしまった。西施物語をいかにして恩愛物語に描くかを重視したからであろう。そこは『太平記』の一特質だと認めるべきである。

## 五、『太平記』の「西施説話」——「二代后」との関連

ここで改めて「西施説話」のあら筋を整理しておく。

- ①西施はもともと越王勾踐の後であった。
- ②呉王夫差が西施を后にしたいと望む。
- ③勾踐はそれを拒否しようとする。
- ④長老である范蠡が西施の入呉を提言。
- ⑤西施は不本意ながら呉に赴き、夫差の后になる。
- ⑥夫差は西施を寵愛し、政事をおろそかにして越に滅ぼされる。

前述の中国側の伝承と比べれば、二点ほど大きな相違が

見られる。一点目は西施が勾踐の後であり、後ほど呉王夫差の后にもなったということである。二点目は西施の登場は越国の策略によるのではなく、好色の呉王が積極的に求めてきたということである。

西施を后として描く要因には、『太平記』周辺に伝わった西施伝説の存在が大きいと思われる。『和漢朗詠集』古注の類には西施が勾踐の后妃であると説くものが確認できる。『和漢朗詠註抄』では、

越王勾踐愛妃、後降<sup>二</sup>呉王夫差<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>西施<sup>一</sup>遺<sup>二</sup>呉王<sup>一</sup>云々。

と簡略に記した。西施が越王勾踐の後だと説く<sup>(1)</sup>以外は、史書と一致する形で伝承している。一方、『広大本和漢朗詠集仮名本』（以下『広大本注』を略す）には、

（西施）美女<sup>ニシテ</sup>形<sup>テ</sup>絶対ノ人<sup>ナレバ</sup>、始<sup>メ</sup>勾踐愛<sup>セシカト</sup>モ、後呉王<sup>ヘ</sup>召<sup>シテ</sup>后<sup>トス</sup>。

とある。西施は絶世の美女で、最初は勾踐の後だったが、後は呉王に召されて后となったと伝える。勾踐の後から夫差の後になったことは『太平記』の西施伝説と一致しており、『太平記』は『広大本注』のような説話に基づいている可能性がある。しかし、周知のように、西施が呉に赴いたのは勾踐が夫差に降伏した後のことであり、『広大本注』

の記述は簡略で話の細部がわからないが、勝者が女性を含めて、敗者の所有物を占有する一般論とも言える。

ところが、西施が越王勾践の後から、また呉王夫差の後になったと話を運ぶことよって、別な理解が生じてしまふ。いわゆる「二代后」の話型に接近するからである。

二代后といえば、『平家物語』で名高い二条帝と多子の話がある。延慶本で筋を整理すると、

①多子は近衛帝の後であり、近衛帝の崩御により太皇太后となる。

②二条帝は好色ゆえに、多子を自分の后にしようとする。

③多子はそれを強く拒絶する。

④実父である藤原公能が説得。

⑤多子は不本意に再入内して二代后となる。

⑥二条帝が多子を寵愛。

になる。『太平記』の西施物語と構造的に近似していることが明白である。これより細部にわたる検証をしていきたい。まず両話の冒頭部分を確認する。『平家物語』では、

(多子) 先帝二後レマイラセ、九重ノ外、近衛河原ノ

御所ニ、先帝ノ故宮ニ、フルメカシク幽カナル御有様也。

とあり、多子が近衛帝の崩御後は、内裏から離れ、ひっそ

りと暮らしていた様子が伝わる。一方、『太平記』では、

又、越王ノ妃ニ西施ト云フ美人御座ケリ。容色世ニ勝レ、嬋媚<sup>タビ</sup>比<sup>ヒ</sup>無リシカバ、越王殊ニ寵愛シテ且クモ側

ヲ放レ給ハザリキ。越王呉ニ捕レ給シ程ハ其難ヲ遁ンタメニ身ヲソバメテ隠居給ヒタリシガ、越王帰リ給ヒヌル由ヲ聞給テ、即後宮ニ帰リ参リタマフ。

となつてゐる。勾践が呉にとらわれたとき、后である西施が難を避けて隠居してしまふなどの描写（波線部）は、漢籍には見られない。日本的な文脈で敷衍した可能性が高い。また、西施が隠居するなどという叙述は後述する「中世史記」の西施伝説にも見当たらず、『太平記』独自の創作かと思われる。そこで二代后の影響を考えたいのである。

『平家物語』の後文では、

永曆、応保ノ比ハ御年廿二、三ニモヤ成ラセ給ケム、御サカリモ少シ過サセ給ケレドモ、此后、天下第一ノ美人ノ聞エ渡ラセヲハシマシケレバ、主上二条院、御色ニノミ染メル御心ニテ、世ノ誇リヲモ御カヘリミ無リケルニヤ、好色ニ叙シ御シテ、外宮ニ引求シムルニ及テ、忍ツ、御艶書アリ。

となる。多子は二十二、三歳になって、女としての盛りを過ぎたが、天下一の美人の評判もあり、好色の二条帝が世



間の非難を無視して多子に求愛したという(傍線部)。なお、「外宮ニ引求シムル」とは「詔」高力士「潜捜」外宮」という『長恨歌伝』を踏まえていると思われる。一方、『太平記』では、

年ノ三年ヲ待詔テ、堪ヌ思ニ沈ミ給ケル。嘆キノ程モ  
頭テ鬢ヲロソカニシテ、膚消ヘタル御形、最モ理ナリ。  
イト、ワリナク藤蘭<sup>フウラン</sup>テ、梨花一枝春雨「二綻ビ」、タト  
ヘン方モ無カリケリ。

となつている。西施が三年待ちわびて、つらい思いに耐え、鬢髪もまばらとなり、肌のつやも消えたが、なおとても美しいという。この描写も二代后に通わせているかと考えられる。また、「年ノ三年ヲ待詔テ」とは、『伊勢物語』第二十四段、「あらたまのとしの三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ」を踏まえている。三年も来なかつた男を見限り、別の男に嫁そうとする女の心情が詠まれる一首である。女は三年間待ちわびた男に諦念して別な男と契りを結ぼうとし、西施は相思相愛の勾踐と離れてむりやり夫差に召されるところという差はあるが、えにしに翻弄される哀れな女性である点は共通する。一方、呉王夫差の要請につき、『太平記』は呉王が使者を立てて越に遣わしたとする。

使者答テ曰ク、我ガ君呉ノ大王、嬌<sup>ウツクシ</sup>ヲ好ミ色ヲ重シテ

美人ヲ尋ネ給フ事、天下ニ普シ。然レドモ未ダ西施ガ如ノ顔色ヲ得ズ。越王古ヘ会稽山ノ冊ヲ出シ時一言ノ約ガアリ、早ク彼ノ西施ヲ呉ノ後宮<sup>カウツキ</sup>ニ奉テ、后妃ノ位ニ備ヘヨトノ使イ也。

夫差は娯楽を好み、天下に遍く美人を求めていたが、まだ西施ほどの美人を得ていない(波線部)。越王には会稽の冊を解くときの約諾どおり、はやく西施を献上して、呉の后にせよという言い方である。そのポイントはいうまでもなく、夫差の好色にある。なお、呉の后を、越まで求めてきたということとは、「詔」高力士「潜捜」外宮」という『長恨歌伝』の文言にもふさわしい。呉王夫差が好色のため、西施のような美人を宮殿の外に求めるといふ描写は、二代后の話と類似し、しかも、中国における伝承には見られない、また、日本で語られる、ほかの西施伝承にも見られない点においては、きわめて大事なポイントになる。

ところで、多子も西施も二代后になつた後は寵愛を受けた。『平家物語』では

御入内ノ後ハ、ヤガテ恩ヲカブラセ給テ、麗景殿ニゾ渡ラセ給ケル。朝政ヲ進メ申サセ給フ。

と記す。二条帝から恩をこうぶることになり、麗景殿に住むことになつたその寵愛ぶりが尋常ではないため、多子が

二条帝に朝政を勧めているのである。その表現は「從<sup>あままつり</sup>此君王不<sup>レ</sup>早朝」から敷衍したのである。『太平記』では、

サレバ一度宮中ニ入テ君王ノ傍ニ侍シヨリ、呉王ノ御心アクガレテ、夜ハ終夜淫楽ヲノミ嗜テ世ノ政ヲモ聞ズ。昼ハ尺日ニ遊宴ヲノミ事トシテ国ノ危ヲモ顧ズ、金殿雲ニ挿<sup>サシバサン</sup>テ、四辺三百里ノ山河ヲ枕ノ下ニ直下<sup>ミオロ</sup>シテ西施ト宴セシ夢ノ中ニ興ヲ催サン為ナリキ。

となつている。西施を呉の後宮に入れた夫差は、終日淫楽に耽溺し、政事のすべてを忘れるのである。それもまさに「從<sup>レ</sup>此君王不<sup>レ</sup>早朝」である。

『太平記』の西施説話は、『長恨歌』・『長恨歌伝』の表現を媒介にしつつ、二代後の物語と多く共通点を有することがわかるのである。

いつの時代も、どれほどの美女であれ、二代の帝王の后となるというのは世を驚かすことであるに違いない。越王の後であった西施が再び呉王の后になるということから、『平家物語』などによって広く語られた二代后である多子に連想を及ぼし、多子の物語から型を借用し、西施説話を翻案したと想像することはそれほど不自然ではなからう。『太平記』は、二代後の話型を用いることによって、西施を政治的な道具ではなく、また、ただの復讐談の中の一人

物ではなく、多子のような、運命に翻弄される哀切な女性としてイメージさせるのである。

## 六、「中世史記」に見られる西施伝説

西施を二代后多子に擬す発想は、ひとえに『太平記』作者の着想なのであろうか。いやすでにその発想を生み出すものが、「中世史記」の分野に生まれていた。

前節では西施を越王の后妃とする説を掲げてきた。一方、勾踐ではなく、父親である允常の后（勾踐の継母か）と説くものも存した。『書陵部本注』では、西施が、勾踐の父允常の后であり、その後は勾踐の后、さらに越の敗戦で呉王夫差に献上されたとする。

西子ガ顔色、双ヒナキニ喩ヘタリ。而ルニ、越王允常ハ、越ノ羅山ニヒトリ至ル時ニ、一リノ女房アリ。薪ヲ取ルニ、麻衣ヲ着タリ。王御ランジテ、容貌美ニシテ、類イナカリキ。汝ヂ、何トシテカ、薪ヲトルヤ。女答テ云、母堂ニアリ。養育ノ志深シト云ヘリ。時、王車ニ乗テ、婦玉フ。夫婦ノ契、不<sup>レ</sup>浅。允常ノ御子、勾踐モ亦、西子ヲ愛シテ、西施ヲ随フ、隨身シテ、呉王ニ夫差ヲ伐ンガ為ニ、呉ニ入。勾踐カコマレテ、菟角スベキ様ナシ。范蠡ト云臣下、謀ニ、西子ヲ以テ、

呉王二献ジテ、勾踐モ范蠡モイカサレテ越二帰。委クハ、史記ニ見タリ。

允常が羅山に行ったときに西施に出会い、彼女が母のために薪を取るといふ親孝行に感動して、彼女を后に立てたとする。そして、允常の死後、勾踐に寵愛される。勾踐が呉を討つて敗れたときも一緒だったので、范蠡の智謀によって、西施を呉王に献じて会稽山の包囲を解き、勾踐らは無事帰国できたとする。この説は、夫差の后になったかどうかは不明であるが、允常と勾踐父子の后になったと伝わる特色をもつ。なお、『永濟註異本竜谷大学図書館本』では、

西施トハ、貌世ニ勝ル美女ナリ。年ワカク貧カリシ時、羅山ト云山ニ入テ、薪ヲ採キ。越王允常、カリシケルガ、此ノ女ヲ見テ、イカニ何心ニ薪ヲバ采ゾト問レケレバ、答曰、老母ヲ養ハントタメニ、加様ノワザヲスルト申シ、カバ、越王、車ニ乗テ、宮ニ帰テ、后トス。(中略)越王允常死テ後、其ノ子勾踐位ニ即テ後、軍ニマケテ、会稽山ニ逃籠テ、ナクナラントテ、此西施ヲバ、呉王夫差ニ、勾踐奉リシナリ。呉王、西施ガ世ニ勝レテメデタカリシニ目テ、越王ヲバ免ジケリ。

ここでは、勾踐も西施を愛したとは書かれていないが、やや簡略にした形で『書陵部本注』とほぼ同じ伝承を記して

いる。また、『書陵部本注』とともに、母の孝養のために薪を採ると話を展開し、西施が越の后になることをも恩愛物語に作り変えているところも注目に値する。なお、傍線を付したように、勾踐が許されたのは、西施の美しさを呉王夫差が確認してからだとする。

一方、『国会図書館本和漢朗詠集』(以下『国会本注』と略す)では、勾踐の伯母であると説いている。

西施ハ越王勾踐伯母、震旦第一美人也。越王ガ呉王ニトラレテ、既ニキラルベカリシ時、此ノ西施ヲ見テ、命ヲタスカリシ也。

この西施のおかげで勾踐は一命を取り留めたとする。傍線を付した一文に注意してほしい。勾踐が自ら西施を夫差に送り込んだのではなく、夫差が西施を見て、その美貌に魅了され、勾踐を免じてしまう話になっている。敵側の美人を見て、その美人の縁者を赦免する類型には、例えば清盛と常葉の話がある。金刀比羅本『平治物語』によれば、義朝の敗戦によって、その子息(特に男子)はすべて殺されるはずであった。しかし、清盛はこの子たちの母親である常葉の美貌に惹かれた。

常葉生年二十三、九条女院の后たちの御時、都の中よりみめよき女を千人そろへて、そのなかより百人、ま

た百人が中より十人すぐりいだされける。其中にも常葉一とぞきこえける。千人が中の一なれば、さこそはうつくしかりけめ。異国に聞えし季夫人・楊貴妃、我朝には小野小町・和泉式部もこれにはすぎじとぞみえし。貴妃がすがたをみな人は、百の媚をなすといへり。大宰大貳（清盛）は、常葉が姿をみ給ふより、よしなき心をぞうつされける。

その結果、常葉もその母も子息たちも全て死罪をまぬかれたのである。常葉を生母としない頼朝は池禅尼の斡旋で赦免されたというものの、その継母である常葉の影響力を完全に否定することはできないだろう。したがって、『国会本注』における西施の形象は、例えば右に示した常葉のケースに近いのではないか。

そのほか、西施密会説もあり、『国会本注』より紹介したい。

潘郎ト云シ者ノ、西施ト云后キノ美女ト密懷ス。依ニ其罪一、里ノ山ニ被ニ配流一。

潘郎という人は后である西施と密通したため、流罪に処されたとする。潘郎、すなわち潘岳は字が安仁で、西晋時代の詩人であり、『文選』に「秋興賦並序」などが収録され、『世説新語』にもその文才に関する逸話が多数記載される人物

である。また、洛陽の道を行くと、婦人たちに囲まれて果物などを投げ与えられるほど、美男の誉れが高かった。この潘安仁は日本文学にも親しまれた人物である。『和漢朗詠集』巻下「妓女」では、「容貌似舅、潘安仁之外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹。」と掲げており、また『海道記』四月九日の記述にも引かれる<sup>16)</sup>。晋の時代の潘安仁は、春秋時代を生きる西施との接触は無論ない。しかも、管見の限り、潘安仁には后と密通するようなエピソードはない。にも関わらず、后である西施と密通して流されたとの説が形成された。

后と密通するといえは、二条の后と業平が思い浮かぶであろう。それは美しい后妃と風流な美男子の密通という類型に入るものである。流罪されたことはないが、中国側にも則天皇后と張文成の例がある。そのような后と密通する美男子という話型が語られる段階で詩歌に優れた美男の潘安仁が引き当てられた可能性もあろう。それを傍証する一例が『宝物集』巻五に見られる。

夏の太后は、嫪毒をあひし、則天皇后は長文成にあひ、  
陵園妾は潘安仁にちぎりをむすぶ。

武則天と張文成と並列した形で陵園妾と潘安仁の風流話が語られている。陵園妾は『白氏文集』巻四「陵園妾」に見

える女性のことであり、宮廷に仕える悲惨な女の代表として白居易が描いた人物である。また『唐物語』第十四話にも見られる。それが帝王の后と認識され、潘安仁と契る話が夏太后と則天皇后に続く形で系譜づけられた。このように、中世日本において潘安仁は、美男子ゆえにさまざまな伝承を生んだことを確かめられた。そうしたなかで、潘安仁と西施の説話も現れたのではないか。

かくして、「中世史記」の世界で、西施は夫差の后から、勾踐の後、さらに允常の后や、勾踐の伯母・継母など多様に伝えられる。また、その美貌ゆえに勾踐らの助命に役立つことから、美女常盤の影が見られたり、さらに、美人の后であるがために恋愛譚の要素をも加えられ、二条の后の姿も重ねられるようになる。美人西施にまつわる伝承は、中世の人々の想像の世界で飛翔し、独自の発展を遂げ、様々なバリエーションが見られる。『太平記』もその豊饒な「中世史記」の世界を利用する形で、『長恨歌』などをも媒体としながら、物語の世界に取り入れたのであろう。

## 七、終わりに

呉越合戦という歴史故事に現れた西施の説話であるが、中国側の伝承においては呉国を滅ぼす功績が大いに語ら

れ、政治的な道具としてのインパクトが強いのに対して、中世日本では、美人という属性と、后という身分が伝承の軸となり、さまざまな美人や后妃の面影を投影して敷衍する説話が生まれた。そんな中で『太平記』は玄宗と楊貴妃の話を強く意識して、西施と勾踐を恋愛物語の典型であるかに描く。また、后であること、特に呉に入内して二代后になったことに着目し、『平家物語』などで広く語られた二条帝と多子の物語の型を借りて、独自に西施説話を構成したのである。

【本文に使用したテキスト一覧】

『史記』、『晋書』：中華書局版。『尚史』：四庫全書データベース。『管子』、『文選』、『世説新語』、『蒙求』：新釈漢文大系。『拾遺記』：和刻本漢籍隨筆集。『遊仙窟』：岩波文庫。『長恨歌』（『白氏文集』）：金沢文庫本。『長恨歌伝』：国立国会図書館デジタルコレクション。金刀比羅本『平治物語』：日本古典文学大系。『延慶本平家物語』：勉誠出版、天正本『太平記』、『和漢朗詠集』、『海道記』、『伊勢物語』：新編日本古典文学全集。『宝物集』：新日本古典文学大系、『唐物語』：日本古典全集。『和漢朗詠集私注』、『和漢朗詠註抄』、『和漢朗詠集和談鈔』、『和漢朗詠集永濟注』、『書陵部本朗詠

抄』、『広大本和漢朗詠集仮名注』、『永濟註異本竜谷大学図書館本』、『国会図書館本和漢朗詠集』：『和漢朗詠集古注釈集成』。

【注】

- (1) 川口久雄氏「伍子胥変文と我が国説話文学」(『国語』第五卷一・二号、一九五七年四月)。
- (2) 増田欣氏「太平記における呉越説話」(『中等教育研究紀要』第六集、一九六〇年六月)、『太平記』の比較文学的研究』角川書店、一九七六年三月に再録。
- (3) 右掲した論考のほか、山田勝美氏「西施説話とその音義考」(『国文学論集』(上智大学)第三号、一九六九年十一月)や、森田貴之氏「天正本『太平記』増補方法小考」巻四「呉越戦の事」増補漢詩について」(『京都大学国文学論叢』十二号、二〇〇九年九月)などの論がある。
- (5) 『越絶書校釈』(李歩嘉校釈、中華書局、二〇一三年五月)を参照。
- (6) 『和刻本漢籍随筆集』(汲古書院、一九七四年三月、宝暦二年(一七五二)刊本)第十集、長澤規矩也の解題による。本文の引用もこれに拠る。

(7) 『苧蘿西施志』(浙江章諸暨市委員会編、陳侃章・何德康主編、杭州大学出版社、一九九一年十月)は、中国に見られる西施に関する史料、詩文を集成する。

- (8) 例えば、『六臣註文選』(宋本による影印。台湾商務印書館、一九七九年)では、当該箇所について「善曰、楚辞曰、受命不遷。生南国、謂江南也。楚辞曰、聞佳人兮召予。毛詩曰、何彼穠矣。華如桃李。翰曰、以佳人喻賢人、不見重於時也。」と註している。朗詠註の原典は不明。
- (9) 天運篇。なお、新釈漢文大系「蒙求」は徐註本を底本にしている。そのほか、書陵部古註蒙求も『莊子』、亀田本旧註蒙求は『列女伝』、国立国会図書館本附音増廣古註蒙求は『列子』を出典としている。
- (10) 卷十七「春秋左氏伝、哀公二十二年」。「尚史」とは洪荒より秦までの歴史を語る史書であり、清の時代の李鍔(鑲白旗漢軍)によって撰せられた。『尚史』の引用箇所次に、「孟子註疏引、今本無」とあり、孟子註疏から引用したことが分かる。
- (11) 『太平記』の本文は玄玖本に基づいて翻刻し、私意によって読みや送り仮名を付し、他本による補入を施したものである。
- (12) 底本になし。諸本によって補う。



(13)

『蒙求和歌』(国立国会図書館本蒙求和歌、伝慈鎮筆鎌倉期写本、中文出版社、一九七三年三月)の注文は以下になっている。「西施ハミメモカタチモタグヒナカリシ女ナリ。ヤマヒニフシテ、ムネヲヲサヘテ、メヲヒソメケレバ、イヨく、コ、ロクルシクイタハシキサマナリ。其里ノミニクキ女トモ、コレヲウラヤミテ、ソラムネヲヤミテ、メヲヒソメケリ。西施ガ顔色コソイカナルニツケテモ、イミジクア

テナリケレ。ミニクキ女トモ、メヲヒソ<sup>ツマ</sup>メケルヤマイスガタ、イト、ヲソロシクゾミヘケル。」

(14) 『胡曾詩抄』(伝承文学史料集成第三輯、三弥井書店)「会稽山」にも類似の説がある。

(15) 『晋書』卷五十五。『世説新語』容止第十四。『蒙求』「岳湛連壁」など。

(16) 「顔を潘安仁が弟妹にかりて、契を参川の吏の妻妾に結べり。」

